

新刊

□田中 肇：昆虫の集まる花ハンドブック
11 × 18 cm. 80 pp. 2009. ¥1,200. 文一総合出版. ISBN: 978-4-8299-0139-7 C0645.

花と昆虫の関係は、「蜜と引き換えに花粉を運んでもらう」ことくらいは常識だろう。だから虫が花を訪れていても、「ああ、やってるな」という程度で眺めているし、観察会でも、いくつかの紋切り型のパタンをあてはめた説明で、わかったつもりでいた。花に虫が群がっていても、10分もすれば蜜を吸い尽くして一匹もいなくなるのが普通とか、カタバミの花は4時間しか開いていないとは知らなかった。

本書は1頁に2種類ずつ、それぞれ3枚のカラー写真と簡単な記述で、142種類の花について、色、形、構造、姿勢、動作などが、虫の習性と関連づけて解説されている。とにかく千差万別で、蜜を持たない花が結構ある。花には雌と雄の時期があり、それに応じた姿勢をとることも念入りに記されている。

植物の配列は花の色でまとめられ、学術用語は使用しないよう心がけたと序文にある。つまり、キクの舌状花だろうとニリンソウのがく片だろうとクロバナヒキオコシの唇状部だろうと「花びら」である。この方が結構わかりやすい。送粉行動にかかわる花のタイプ分けが「長管」「下向き」「はい込み」といった、七つのアイコンで示されている。花期のアイコンも七つある。多くの花は、よほどうまくルーペを使っても、どこに何があるやらわからない。定評ある著者の接写と実物を見比べれば、「観察した」という充実感が得られるだろう。この本を手には、花の前でジックリ座り込んで観察する人が増えてほしいものだ。もっとも、近頃のように何十人もの集団で、植物名と近似種の違いを連呼しながらコースを消化しようとする中でそれをやると、大渋滞になるだろう。一人静かに時を忘れるような観察に向いている。袋綴じなので、ハンドブックとして野外で頻りに開閉するとこわれてしまいそうで、背中をホッチキスで綴じる簡易製本の方が使いやすかったと思う。

(金井弘夫)

□邑田 仁(監), 米倉浩司：高等植物分類表
11.5 × 18 cm. 189 pp. 2009 Oct. 20. ¥2,381. 北隆館. ISBN: 978-4-8326-0838-2 C3045.

伊藤 洋氏の高等植物分類表は、その簡便な記述によって、永年にわたって多くの人たちに利用されてきたが、1968年が最後の改訂であり、その後の進展に対応するこの種のハンドブックはない。とくに最近の分子生物学の急激な発展の結果、様変わりした分類体系を、簡潔に整理表現した分類表が期待されていた。

本書はDNAによる分子系統学の最新の結果を総合したAPG分類体系に、シダ類、裸子植物などの同様な成果を加えて整理したもので、われわれがこれ迄なじんで来たどの分類体系とも異なっており、とくに旧体系で一つの科にまとめられていた属が、あちこちのかけはなれた科に配置換えされている上、目の内容や配置も異なっているので、とまどうどころか船酔いを起こしそうな「混乱」ぶりである。29-102頁に示された分類表(APG対応)で、それを実感できるだろう。だからその前に、2頁の「この分類表の使い方」と13-28頁の「新しい植物分類体系」をじっくり読んでおく必要がある。酔い止め薬として、103-113頁に伊藤：新高等植物分類表との対照表が、114-125頁にCronquistとEnglerの分類体系との対照表が用意されている。127頁以降に属以上の学名(約3,400件)と和名(代表的種名を含む)の索引があり、約5,200件の和名の所属が検索できる。(金井弘夫)

□大場秀章(編著)：植物分類表 B6判. 511 pp. 2009 Nov. 20. ¥3,333. アボック社. ISBN: 978-4-900358-61-4 C3045.

基本的には米倉氏の高等植物分類表と同根であるが、細部では順序が入れ代わっているところがある。たとえば、1-247頁にわたる分類表の最初の頁の目の順序は、米倉本ではヒカゲノカズラ目、イワヒバ目、ミズニラ目であるが、大場本ではヒカゲノカズラ目、ミズニラ目、イワヒバ目となっている。凡例は6頁におよぶ丹念なものである。257頁からは植物分類体系の変遷と題して、75頁にわたってリンネから今日に至るまでの歴史を解説している。学名索引(333-391頁)は約8,300件が見られるが、示種名まで示してあるのは、和名がなかったりなじみが薄い栽培品に限られる。和名索引(393-511頁)は約16,600件。わが国の野生植物のおそらくすべてに加えて、多くの栽培品も含まれている。xxxi-xxxviii頁には科が変更された主な属の一覧があり、約200属が従来知ら

れていた科から移されていることがわかる。例えば、ウメバチソウ属→ニシキギ科、イイギリ属→ヤナギ科、ムクノキ属→アサ科、シナノキ属→アオイ科、ウリノキ属→ミズキ科、クガイソウ属→オオバコ科、マツムシソウ属→スイカズラ科。これについては米倉本にも解説されているのはもちろんである。

これら二書は独立に同時並行的に企画され、間を置かずに刊行されたので、著者らは「他書を参考にする」ひまはなかったと思うが、それにしても米倉本はハンドブック的、大場本は参考書的と相補的にできており、値段も手頃で、二つを手に入れておいても無駄にはなるまい。そのとき神経質なユーザーが気にするのは、前に触れたように一部の順序が入れ代わっていて、それにつれて整理コードが異なっていることだが、これは本質的な違いとは思われない。改訂を繰り返して行く間に、収まるどころへ収まるのだろう。

ところでこれらの分類表をどのように理解し、使うのか、ということで考え込んだ。新たな観点からの系統分類体系の紹介と解説という点では、きわめて歓迎すべき作品である。これ迄にもいろいろな根拠によるいろいろな分類体系が出されているが、それらが完璧なものではなく、もっとスカッとしたものがあって欲しいことは、みんなが認識している。ただし今回の分類体系が決定打で、多少不明な点が残されているにしてもこの線しかあり得ない、という空気になるのなら、私は立ち止まってしまふ。この体系は葉緑体 DNA に基づいているので、「核の DNA ならどうなるのだろうか?」と思ってしまうからだ。「ミトコンドリアの DNA ならどうか?」と言ったら、笑われるのだろうか?細胞内共生説によれば、葉緑体にせよミトコンドリアにせよ、本来は異種の生物が細胞内に取り込まれたものだという。だから核の DNA の系統樹は葉緑体 DNA のそれとは異なるパターンになるだろう、と思うのはむしろ当然という気がする。ミトコンドリアでも同様である。「ミトコンドリアの DNA 構成は退化していて単純である」と言われるが、それだけに旧い系統を反映しているのではあるまいか?動物でも同じように DNA の系統樹が作れるだろうが、それは葉緑体 DNA の系統樹とは依って立つ基盤が異なるのだから、比較のしようがない。従来通用してきたメンデル遺伝学は、核の DNA が構成する染色体の行動によって、生物一般に通用するものとし

て合理化されてきた。葉緑体を持っているのは植物だけだから、植物だけが他の生物と異なる根拠の系統樹を主張したら、生物の発生・進化を統合的に理解するさまたげになるだろう。となると、この系統分類体系は、数あるものの一つと考えねばなるまい。

異なる細胞器官の DNA 系統樹は、別個なパターンを示すだろう。つまり多次元空間のどこかでつながったそれぞれの系統樹が展開される。われわれはその全体を一度に見ることはできない。紙の上で描けば、二次元でしか表現できない。タクソン A とタクソン B の類縁の近さ・遠さは、そういう空間をどの面で切るかによって、近くなったり遠くなったりするだろう。多次元空間のどこかでつながっているさまざまな系統樹のうちの一つが、三次元空間に成立しているとしても、われわれがそれを紙上で表現するには二次元しか使えない。類縁の「近さ・遠さ」というものを、うかつに口にすることができない時代が来るのだろう。

一方、伊藤：植物分類表が広く利用された理由は、もっと別なところにあったと私は理解している。たとえば自己のコレクションを整理するとき、どんな配置にすればよいか、記録や発表をするとき、どんな順序で、どんな科や属の名前を使ったらよいか、という問題に簡便に答えてくれる、というところに、大きな利用価値があったのだと思う。今回の分類表は、そういう問題に答えてくれるだろうか?そういう点から見ると、深刻な問題が起るだろう。たとえば、この体系に従ったフロラリストや、「クガイソウ (オオバコ科) の〜の研究」と題した報文を投稿したら、受け付けてもらえるだろうか?たぶんもらえると思うが、そうすると、旧来の体系によるリストや報文も、同じ誌上で容認するのか、という編集方針上の議論が起るだろう。これは専門誌よりも同好会誌の方が深刻だろう。つまり「どちらが『正しい』か」という議論にすり代わってしまつて、とくに調査報告や地域植物誌を刊行しようとする際、重大な問題になるに違いない。試験で「次の植物は何科に属するか?」という問題は、コワくて出せなくなるだろう。さらに、教育の場で扱うとなれば、あいまいな決定はできないから、博物館や大学には、それらの判断を求める問い合わせが頻々と来るに違いない。「正義は一つ」というモットーは悪いものではないが、そういう立場にある専門家は、柔軟な対応を用意しておく必要があるだろう。

「コレでなければ分類学ではない」というような主張が、横行しないことを期待する。

少なくとも、「この分類表の順序に標本棚を配列しよう」とする標本室は、たとえ新設の機関でも現れないのではないかと。「不確定要素が多いから、しばらく様子を見よう」ということになるのだろう。ただしこれは表向きの理由で、「現行の配置と違いすぎるのは不便だ」という保守派が大勢いる間は動かせないだろう。高等植物の標本室の配列は、一次元でやるほかはない。コケ類のように、名前のABC順に標本を配列する分野なら、こういう問題はあまり起らないのだが...

(金井弘夫)

□横浜植物会：横浜植物会の歴史—創立100周年記念誌— B5判. 382 pp. 2009. 同会. ISBN: no number.

わが国の植物同好会で最古の歴史を持つ横浜植物会の百周年記念出版である。口絵7-64頁では、さまざまな時代の採集会の情景や肖像写真によって、お名前ではしか知らない方々の風貌や手跡に接したり、服装や装備の変遷をたどったりすることができる。これに加えて、貴重な植物の標本、最新の植物画などが並んでいる。65-242頁は資料篇で、会報を含むいろいろな出版物から抽出した会史関連の記述、年報・会報総目次、例会記録、会員の執筆活動記録、役員関係記録などが見られる。先頭の沿革が1頁、年表が6頁は簡単すぎるように見えるが、後続の頁の詳細な記事がそれに代わっている。243-296頁は会員や関係者の記念投稿、297-378頁は当会関係の歴史的資料・標本に関する特別寄稿である。多士済々の会員達が総力を挙げて制作したものである。どの頁を開いても読み切れない内容で、横浜植物会ばかりでなく、日本の植物分類学の歴史の参考資料として有用である。

最後に一つだけ不満を言うと、ブックケースがキツすぎて、本を取り出すのが大変だったし、しまうのにも強引に押し込まねばならなかった。これでは不便なので、ブックケースを解体して組み立て直した。飾っておくものではないので、たまたま私が手にしたものだけの事例であってほしい。頒価は記されていないので限定頒布と思うが、連絡先は次の通り。240- [redacted] 横浜市 [redacted] (Tel/Fax [redacted]) [redacted] . 横浜植物会。 (金井弘夫)

□日外アソシエーツ：植物3.2万名前大辞典 A5. 772 pp. 2009 (第二刷). ¥9,333. 日外アソシエーツ. ISBN: 978-4-8169-2120-9 C0545.

第一行の見出しが「アアソウカイ亜阿相界」とあるので、栽培植物の品種名がたくさん出ていて、作出した新品種の名前を考える参考になるかも知れないと思った(本誌83(2): 124)。本書は植物名(コケ、菌、地衣、藻を含む)の仮名読みを見出しとして、漢字名のあるものはそれを示し、ごく簡単な記述によって、より詳しい記述のある文献への手がかりを与えることを目的としている。凡例によると、集録対象は国内の代表的な図鑑・百科事典とある。アアソウカイの説明は「パキポディウム・ジェエイの別名」である。そしてパキポディウム・ジェエイを牽くと「(*Pachypodium geayi* Cost. et Bois) キョウチクトウ科。別名亜阿相界。高さは8m。花は白色。園芸植物」である。本書の目的からすれば、説明が物足りなくても仕方がない。しかし、ざっと見たところ、学名の仮名読みの見出しが多く、園芸品種名はあまり目につかない。そこで学名の仮名読みと栽培品種名の見出しの数がどのくらいあるかを調べてみた。学名の仮名読みは38%、栽培品種名は8%だった。栽培品種名は、通常の図鑑に出てくるような普通なものかぞえなかったから、そういうものを含めれば10%、3,200件程度だろう。ここで考え込んだのは、学名の仮名読み綴りで検索する需要がそんなにあるのだろうか、ということだ。属の学名の仮名綴りは普通に流通しているから、その源を探る必要はあるだろう。しかし種名までを学名で口にする人が、いまさらこういう辞典を使うとは思わない。それに学名の仮名文字表現は、人によって異なる。最新園芸大辞典では、上の植物はパキポジウム・ジーイである。この本の目的からすれば、ありそうな綴りはみんな示した上、統一した表示法を決めればよさそうに思うが、そういう配慮はされていないようだ。*Viola* はビオラ、ヴィオラかと思ったら、ウィオラという綴りしか出ておらず、おまけに「ウィオラ」の見出しには「ニオイスマレの別名」とあるだけだ。もっとも、スマレの項を見ると「堇(*Viola mandshurica*)」と「スマレ科の属総称」とが別項目として立てられているから、わかる人にはわかるだろう。また *Smilacina* はスミラキナとスミラシナで別な植物の見出しに使われている。原典の表示がまちまちなのは仕方がないが、こう